大館の歴史散歩

古記録・紀行文を歩く ⑥

巡見使随行員のみた大館

―東遊雑記・古川古松軒―

徳川三代将軍家光は、諸国の国情、民情等の視察調査のため、旗本の中から選ばれた者を巡見使として任命、諸大名統制のための武家諸法度を補完するものとして関東・関西へ派遣した。その後、巡見使派遣範囲は五畿七道に広げられ、将軍の代替わり時には恒例行事として実施されるなど、十二代将軍家慶が天保九年に派遣するまで続いた。

幕府は巡見使派遣にあたり、道路、橋の補修のほかは、贈遣・旅舎建築・茶亭の新設・送迎の禁止、人馬戸口の事前調査の不必要等を指示した。しかし現実的には、道路の補修での民衆の労苦等が菅江真澄の著作に見られるほか、茶亭の新設、送迎等が行われ、各藩にとって巡見使は、やっかいな、歓迎できない旅人であった。

檜内付近図

各藩巡見にあたっては、案内者が付き添ったが、藩の中には質問されたこと以外のことは話してはならないと指示するところもあり、報告の際には前回、前々回と同様の返答をしていたようである。

天明八年は徳川家斉が十一代将軍となった年である。その年の五月六日、藤沢要人（使番）、川口久助（御小姓組）、三枝十兵衛（御書院番）の奥州巡見使が、奥羽、松前、蝦夷地へ向かって千寿を出発した。

東遊雑記は、その中の三枝十兵衛の随員となった備中国岡田藩住人古川古松軒の、天明八年五月六日から同年十月十八日千寿着までの日記である。

同書は一之巻から二十之巻で構成され、久保田藩については、七月一日吹浦から有耶無耶関を通って小砂川に入り（三之巻）、七月十四日大館から碇ケ関へ向う（四之巻）までが記されており、原著には所々に絵図が挿入されている。（平凡社版無）

七月十三日、一行は綴子を経て大館に入り、「大館は久保田の太夫丹波の在所なり、家中数多くにて、知行七千石といえど、地方ひろびろとして三万石あるべしという、市中五、六百軒ばかり大概の町なり」この地を「檜内郡」と称すと記し、稲の生育を見て「早稲出でてみごとなる生いたち…中略…稲に相応せる土地」と感じ、「中国地方の一国ほどある」と比較してこの地方の豊かなるを述べている。

しかし、風俗を論じ農民の状況を「農業のいたしかた不調法にて、強いて地の利をとる心もなく…中略…自分貧賤を招くように思われ…中略…屋宅のみぐるしさ、衣服のつづれもいとわず、米のたくさんなるままに、平生遊び暮しにてすむ」と、感じとったままに厳しく感想を述べ、「上方筋の人物と大いに異なる」と比較している。

奥羽西国ノ界矢立峠ノ図

大館の旧城跡を見て「いかなる人の旧跡かをしるものなし」と記し、長木沢の大蕗について「大館より地一里余、長木山と言えるところに生ず、食用にならず大いなるは長さ六尺丸さ六、七寸なり」と記している。また、方言の「ネマル」という言葉も文中に見える。

翌十四日、大館を立ち白沢を経て碇ケ関へ向かうが、矢立峠を「淋しき街道、奥羽の界矢立峠、険しき山越え…中略…頂より下して矢立杉という大木あり…中略…矢立杉の由緒なし」と記録している。

この書は、巡見使随行としての古松軒の自由な観察、分析の鋭さと、巡見使という名前とは裏腹に、その行程の厳しさからくる悲鳴のようなものとが交互に感じられると共に、大館地方を知る一書である。

市役所史跡探訪会

私の本棚

中央図書館新着図書

『娘におくる言葉』

高田敏子著　大和書房

「人はいつも感動を追い求める……」

「与えられた感動はさめ易く……」

「自分で作り出す感動を大切にしたい……」

死に対面する時まで感動を追い続けた、女性詩人のエッセイ。

一般書

◇詩城の旅びと（松本清張）◇幕末大盗賊（津本陽）◇失われた鉄道を求めて（宮脇俊三）◇評論家ごっこ（永六輔）◇パイナップリン（吉本ばなな）◇C・W・ニコルの黒姫日記（C・W・ニコル）◇てとテと手（三田佳子）◇結婚ぎらい（田辺聖子）◇ペルソナ・ノン・グラータ（夏樹静子）◇秀吉が聴いたヴァイオリン（石井高）ほか

児童書

◇がんとたたかう子どもたち（ベリイマン）◇白い帆は青春のつばさ（高永洋子）ほか

10月のテーマ関連図書コーナー

『秋の夜長を楽しむ』

親子読み聞かせ会

毎週金曜日　午後2時30分から

中央図書館の休館日・10月26日、11月3日